

ンド人の四分の一が神戸に住んでいるという。
尚この記念誌の希望者には実費で配布してくれる。

んなアフリカの日本人社会と旅行者の実態と病理をレポート。現地人への差別、アフリカ男性を求める女性等々、渋谷さんが見たものは現在日本が抱えている最もダメな部分であった。

とで、現在は和田防波堤のみで行われている手法。自ら「神戸備中釣保存会」の指導員も務めている片山さんだが、この独特の釣りかたを後世へ残したいという願いを込めてベンをとった。備

史遺産、観光情報などがせて紹介されている。



日朝文化

卷之三

■お問い合わせ下さい
印電協会会員
申込先
関西本部北区
鈴蘭台東町9-1
TEL 072-26
FAX 072-5915633
591-8887
★(記念誌はなるべくFAXか
ハガキでお申し込み下さい)
■海外に関わる日本人への
警鐘のレポート発刊
神戸在住のフリーライタ
一渋谷幾三さんが新風書院
よりドキュメント「アフリカ
の現代日本人達」を出版

★備中釣りの神髓をこの二冊で
ト。千五百円。

などが、自らのイラストと味わい深い文章で淡々と綴られている。千八百円。

★スリランカ展

毎日の生活の中の一瞬をヨガ行法と考える「生活ヨガ」を提唱しています。取り組む気持ちがおこつた時が、「ヨガ」のスタートなんだですよ」と山本ヨガ研究室所主宰の山本正子さん。

3月にJDCより出版された『ヨガ・幸福への招待』(300円)はヨガを始めた人、ヨガを深めたい人への山本さんからの力強いメッセージ



片山 重吉6



基督教遺跡「川辺ノ谷」大塔

かつて若者達のロマンの対象であったアフリカ。今では多くの日本人が住み、多くの旅行者が訪れるようになったが、現地では日本人の起こす事件や問題が続発している。この本ではそ

古田 八

備中釣告伝

施されている発展途上国商品展示事業の第六十回目の催しとして開かれているもの。今回の展示会では、輸出量世界一の紅茶や織縫製品を中心とした主要輸出品の展示・即売のほか、スリランカの国情、文化、歴

く解説。食事療法の紹介の後は、ヨガの最終目的でもある「瞑想」へと続く。山本さんは自身の体験や、神の化身「サティア・サイババ」とのインドでの出会いについてなど、読み進むうちに全宇宙にひろがる精神世界

研究所（神戸市灘区水道筋6-3-1
番地）078-1-861-1025）まで。

の情報紹介等、トータルな
リサイクル情報が満載され

★日本郵船神戸コンテナ・フレイ
ト・ステーションが5月30日(月)
に、六甲I・コンテナ船埠頭第6
7バースに竣工。財団法人神戸

港埠頭公社松浦勢一理事長。根本
二郎代表取締役社長)

★心豊かにリサイクルライ
フを実践してみませんか
リサイクルライフを実践

している方のためのハンデ
イーな情報ガイドブック
「得々リサイクルSHOP
ガイド関西版」がリサイク
ル文化社より出版された。



山本 正子さん



関西版は、好評を博した全
国版、首都圏版に続き発行
されたもので、衣類、家具、
CD、ギフト券等あらゆる

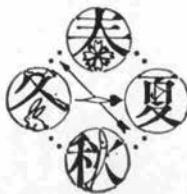
この本を読者三名の方に
プレゼントします。左記の
要領でお申し込み下さい。
■応募方法

葉書に住所、氏名、年齢、職業、
電話番号を明記の上、月刊神戸つ
子「ポケットジャーナル・リサイ
クル本プレゼント」係へ。締切は
6月22日(水)。当選者には小説よ
り御連絡差し上げます。

引き込まれる。自分の体
と心に向き合い、本来持つ
ておられる力を信じることによ
り目覚める、健康、勇気、
希望。自分自身を模索中の
方は是非ご一読を。

■お問い合わせは、書店 山本ヨガ
スト(音楽&うまいもん)
4ガール&ギャンブル
5サイトシーン(景色)
6ショッピング(買物)な
どが挙げられている。こ
れらの要因に加えて、都
市の活性化に必要な手法
として、イベント・オリ
エンテンド・ポリシーと
いうことを言つたのは、
作家の堺屋太一氏であつ
た。この考え方も確かに
一世を風靡して、都市の
活性化、街づくりに多く
採り入れられてきた。そ
れは、現在でも飽くこと
なく続いている。従来の

花時計



★「プロデューサー」の

登場こそ俟たれる

都市の活性化のために
どんな方法があるのか必
要なのかということにつ
いては語り尽されてき
た。が、可成集約された
“観客誘因”として
1歴史 2フィクション
3リズム&ティ
(物語)

1歴史 2フィクション
3リズム&ティ
(物語)

の活性化に必要な手法
として、イベント・オリ
エンテンド・ポリシーと
いうことを言つたのは、
作家の堺屋太一氏であつ
た。この考え方も確かに
一世を風靡して、都市の
活性化、街づくりに多く
採り入れられてきた。そ
れは、現在でも飽くこと
なく続いている。従来の

△YV

の活性化への密着で
ある。その為に必要な
のは「プロデューサー」の
登場である。所詮、文化
催事はボランティアによ
って成り立つが、地元の
状態も十分理解して催事
を組み立てられる「プロ
デューサー」を育てなければ
文化は育たない。

“観客誘因”として

1歴史 2フィクション
3リズム&ティ
(物語)

1歴史 2フィクション
3リズム&ティ
(物語)

3回に亘って開催。

お申込／神戸ネオトロピカル協会
事務局 電話 (078) 242-5690 藤本ハル

OKKO POST

ひとつ・いん



★フランス料理が身近に楽しめるレストラン

去る3月に三宮サンセツ

通りにオープンしたのが海の幸フランス料理と神戸牛ステーキのレストラン

“マリーナセゾン”。

瀬戸内海の新鮮な海の幸をふんだんに使い、素材を生した料理が持ち味。日本料理・中華料理の手法も取り入れ、ボリシーや持った独自のフランス料理と神戸牛ステーキを提供してくれる。味には絶対の自信を持つ店だが、リーズナブルなお値段がモットー。3千9百円のセットメニュー、5千円の神戸牛ステーキコ

ース等、何ともお得。「お店はお客様が作るもの。わがままを言つてもらえるお店にしたい」と総料理長兼支配人の増岡さん。気品がありながら肩肘張らない雰囲



店内はゆったりした空間でくつろげる

■中央区北長狭通2-5-11タイ
シンサンセツビル1F 17時~
12時~15時(日曜・祝日のみランチあり)
078-391-5670

★パールシティの和食処

ホテルパールシティ神戸

1階の和食処“花真珠”が新装オープン。椅子席と座敷3室(予約制)があり、和紙や間接照明を使つたネ

オ・ジャバネスクな空間に

★活きのいいのは魚だけじゃない! “うおぱり”

新神戸オリエンタルホテ



「うまい魚を食べて下さい!」左は店長の奥野さん

■中央区北野町1-3 新神戸オリエンタルホテルB3 電話 078-12260 11時~22時



和服の女性が笑顔で迎えてくれる

なっている。テーブルとテーブルの間にゆったりとスペースがとつてあるので、商談を兼ねたビジネスランチ、会食にも使いやすい。

リブールの間にゆつたりとスリ抜けた奥にある大きな水槽。中には多種類の魚、えび、わびなどが勢いよく泳ぐ。活魚・鮨・割烹の店“おほり”が以前同じ場所にあった店を引き継いでオーブンしたのは4月16日。薄利多売覚悟のそのサービスには頭が下がる。まず驚くのがその安さ。おこぜフルコース8千円など、本当にいいの?と言いたい。神戸では飲めない全国の銘酒も揃い、通にも喜ばれるこ

と間違いなし。「食べたい膳(各1600円)、季節御膳(2千円)などがあるが、6月からさらにリーズナブルな定食ができるそうなので、要チェック。夜は季節の食材を使った懐石が3800円~7千円。神戸空港始ると、神戸では関西国際空港に一番近くなるこのホテル。海外への行き帰りのお客様をもてなすにもいいですね。

■中央区港島中町7-5-1
ホテルパールシティ神戸1階
電話 078-303-0100 11時半~14時
17時~22時

歌つて踊つて、ありがたや 兵庫大佛まつり

三条 杜夫

（放送作家
フリーライター）

写真／森田 篤志

「赤いたすきかけた大仏さんが出征しはったんや。行かんといでゆうて、市民が泣く泣く見送つたんやで」何度も、こんな言葉を耳にした。

奈良の大仏、鎌倉の大仏と並んで「日本三大仏」といわれた兵庫の大仏が第二次世界大戦の金属供出で解体され姿を消した。「昔、能福寺に大仏さんがいてはったんやで」懐しむ市民の声が届いたのだろう。平成3年5月、大仏さんが帰つて来はつた。総工費5億円、身の丈11m、台座7m、重量60t。——平成の大仏建立は、まさに神戸市民の血と涙と汗の結晶だった。実際に47年振りによみ返つた兵庫大仏を歓迎して誰れいうともなく始ました。“兵庫大仏まつり”が、今年、第4回目を迎えた。去年よりは今年、今年よりは来年、と、ますます大仏に心を寄せ、みんなで盛り上ろうと願う市民の意欲が「兵庫大仏ありがたや節」という歌まで誕生させて、二代目大仏は初代に負けぬ、いや、それ以上の善男善女の心の支えとして定着しつつある。



日本三大仏のひとつ“兵庫大仏”が能福寺にある

おもちゃ箱をひっくり返したように

楽しいプログラムの数々

JR兵庫駅を南に徒歩7分。能福寺は平清盛が剃髪した寺として知られるところだ。その境内に大仏はデンと青空を背に鎮座している。緑青色の大仏が周囲の木々のみどりに映える季節に大佛まつりは幕を開く。

5月9日(月)、午後3時、境内に「ゴーン」と鐘が鳴りひびいた。それを合図に餅まき、豆まきが行われた。豆といつても、大豆ではない。ピーナツだ。そのあたりがハイカラ神戸らしくておもしろい。大仏さんの奉納といつても、日本調のだしものだけではない。シャンソン、ハワイアン、サンバ……洋の東西をミックスした楽しいプログラムがびっしり用意されて、まるでおもちゃ箱をひっくり返したようなバラエティに富んだエンターテイメントが次から次へとめくるめくように行開されるのが、この大佛まつりの自慢なのだ。

オープニングを飾る花柳五三輔さんの祝舞「三番叟」が、厳しくさの中にもはなやかさをかもし出して胸を打つ。兵庫区連合婦人会の新舞踊は、親しみやすい歌に乗せての踊りが見る人の心をなごめてくれる。

町娘のかれんさを表現した「花ぐるま」や荒波にめげず雄々しく生きる様を踊りにした「人生祝い唄」など、日ごろのエプロン姿とはうつて変わったお母さんたちのあでやかな着物姿が目をくぎづけにした。続いてのシャンソンは、堀郁子さんと「音楽の家」の門下生たちお得意のステージが、早くも観客を酔わせる。

ちょっとと変わりダネとしては、神戸新聞文化セ



(左上から右へ) 参道にはたくさんの屋台がならぶ。堀郁子さんと「音楽の家」門下生によるシャンソン。花柳五三輔さんの祝舞。境内には古道具屋が店を開き。丹野サヨ子さんらのハワイアン。

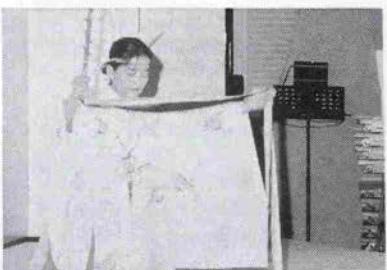


兵庫区連合婦人会のみなさんによる「兵庫大佛ありがたや節」

神戸神事芸能研究会の「筑紫舞」



兵庫木遣り音頭



ンター作詩作曲教室の発表。講師の作曲家・小野瀬晃一さんは「兵庫大佛ありがたや節」の作曲者でもある。「皆さんが教室で習って作った歌がもしヒットしたら、孫子の代まで著作権料が入って喜ばれますよ」と、ほほえみを誘った。

能福寺講堂のステージがとりわけはなやぐのはハワイアンフラダンス・ショー。アラニサヨコと丹野サヨ子さん率いるチームが「南国之夜」「カイマナヒラ」など、甘いスチールギターの調べに乗って、常夏の国・ハワイへといざなってくれた。二宮神社を拠点とする神戸神事芸能研究会の「筑紫舞」の後は、兵庫木遣り音頭が披露された。国際港都・神戸の原型を築いた平清盛。彼が手がけた経ヶ島の名残りを伝える兵庫運河。そこにたくわえられた材木をあやつる男たちの心意気をほうふつさせる木遣り音頭は、保存会メンバーたちの熱演で、神戸っ子の胸をおどらせた。

初夏の陽ざしがようやく、たそがれの色を感じさせようとするころ、このたび作られたばかりの「兵庫大佛ありがたや節」の発表が行われた。作詩は月刊「神戸っ子」編集長の小泉美喜子さん。実は、彼女は知る人ぞ知る作詞家でノートにびっしりたくさんの詩を書き貯めている。作曲・小野瀬晃一さんとのコンビで、昨年には「フルーツフルワーサンバ」を打ち出して話題を呼んだことは記憶に新しい。さて、大仏音頭、歌うは神戸のタ坊。ハリのある声で、朗々と歌い出すと、兵庫連合婦人会の面々が踊り出す。この曲、若柳吉金吾さんの振付まで用意されているという豪華版だ。『ありがたや』ありがたや、兵庫大佛ありがたや。兵庫津の道ひとりで詣りや、美男におわす



若柳吉金吾さんの「越後獅子」

(左上から右へ) カラオケ大会で優勝した間曾さん。生田神社獅子舞。林秀姫さんの韓国民族太鼓。

矢野正文さん指揮の神戸フラウエンコールによるコーラス。

大佛つかん……

軽快でそれでいて哀愁もただよう、実にいい歌だ。たかはしもうさんがイラストを描いたカセットテープが飛ぶように売れた。

夜の部の呼びものは第1回カラオケ大会。兵庫区はもとより、神戸市近郊から参加の30名余りが得意のノドを競い、13名が翌日の決勝大会に進出することになった。

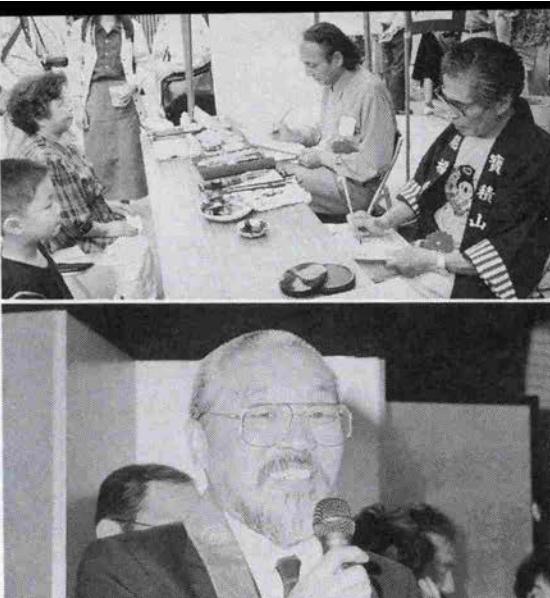
大仏と共に神戸つ子の平和をねがう 名物行事に

翌くる5月10日(火)も天候に恵まれた。参道に軒を連らねた一口カステラ、綿菓子、イカ焼きなどの店が縁日ムードを盛りあげる。司会をやりながら、僕が息をのんだのは、若柳吉金吾さんの「越後獅子」。昔、映画で観たあの特有の姿で、吉金吾さんは境内狭しと踊りまくった。まるで、百年も二百年も時計が逆戻りして、僕は本当に越後獅子や角兵衛獅子が活躍した時代に迷い込んでしまったのではと思うほど感動した。大仏の台座の石段を一つ歯の下駄でピヨンピヨンと跳びはねるクライマックスには、大仏さんの顔が確かに一瞬、ほころんで「ほう」とため息をもらさはったのを、僕は感じた。「大仏さんも喜んではる」僕は素晴らしい催しものの司会をよくぞやらせてもらったものだと、思わず合掌した。

まり遙さんのポップスナンバー、音楽家・矢野正文さん指揮・神戸フラウエンコールのコーラス、林秀姫さんの韓国民族太鼓と唄に統いて、月刊神戸つ子サンバチームのサンバがムードを新、いやがうえにもお祭り気分を盛り上げた。生田神社獅子舞、神戸青年合唱団の和太鼓と、

まつりはぐんぐんファーバーしていく。

熱唱する三代沙也可さん（上）
と神戸のター坊。



（上）高橋孟さんらの似顔絵コーナー

（下）雲井世雄住職



今年の呼びものは、何んといつてもカラオケ大会の決勝戦だ。2時間余りにわたる接戦の結果、兵庫区から参加した間曾松吉さんが「父娘坂」で大仏大賞を獲得した。会場に立見が出るほどの熱気で声援を送ってくれた観客を魅了したのは、ゲスト歌手の神戸のター坊と三代沙也可のステージ。観客はうつとりと聴きほれ、わくんばかりの拍手でたたえた。たかはしもさん、初田寿さん、佐藤廉さん、大橋良三さんら文化人のゲスト出演も見もので、この大仏まつりがいかに幅広い人たちに支えられているかを実証して、今後の発展を予知させた。

二日間にわたるまつりのフィナーレは、誰いうとなく始まった「兵庫大佛ありがたや節」の大合唱。出演者、観客一体となっての大熱唱に、演出を担当した岡田美代さんまで手拍子を打って、関係者の健闘をたたえる。円満な顔をいつそう丸くしてニコニコと見守る住職の雲井世雄さんも、これほどの満足はないといった表情。

　　△世界の平和は神戸から、一願成就　夢成就

　　サテ　　ありがたや　　ありがたや……

講堂からもれ出た声が午後9時になろうとする境内におよんで、夜空に浮かび上った大仏さんが「わしはどんなことがあっても出征はしない」と、約束してくれたような気がする。来年は5回目を迎えるこの大仏まつり、地域の人たちの熱い意欲に支えられて、神戸っ子の平和をねがう心を広く全国にアピールする名物行事として発展していくに違いないと僕は思った。

K.F.S. NEWS 175

コウベ・ファッショニ・ソサエティ

神戸ファッション市民大学OBによるグループ
神戸のファッション都市化をめざす

事務局／神戸市中央区東町113-1 大神ビル9F
月刊神戸っ子内 TEL.078-331-2246

KFS20周年に向けて—KFSトーク。



トーキングKFS。春秋年2回のKFS名物として催しておりました。立亀先生の公開講座は、私共活動の中核ともいえるものでした。しかし先生の突然のご逝去により新たな企画が必要となりました。20周年のかかわりも、ふまえて会員皆様方のご意見をお聞かせ下さいと始まりました。

「年に1回にしても良いから名の通った先生を招請する。たとえば、大内順子さんとか水野正夫さん等。KFSのメンバーで講師の出来る人が居られるのだから順次お願ひし、異業種の集まりだからその特徴を充分に出した専門的なお話しを聞かせて頂く。昨年神戸市より初めてマイスターに認定された方々にお話しを伺っては。神戸の生活文化追求」等々活発な意見が続々と

出ました。9月16日には20周年記念イベントとして、コーディネーターに小室豊允氏、パネラーに新谷秀紀氏、武田則明氏、堀江珠喜氏、高野多美氏の4氏をお迎えし“神戸いまみらい”をメインテーマに「激論3時間」を開きますが、その中でKFSのやるべき色々な意見が出てくるだろうから、それからじっくり考えてはと慎重派や、小室豊允サロンを開いて色々な分野からインナーナショナルなお話しを聞かせて頂くという意見もありました。「私達が受講したファッション市民大学が今の状態では、なくなったも同然。なんとか、我々の手でもう一度再開出来ないものか。あの素晴らしい感動を、若いファッションに感心のある人達に味わってほしい。お互い勉強した仲間同志が

講座の終った後このまま別れるのは惜しいと出来たのが、今のKFS。原点に戻って、何歳になっても一生が勉強、これで良いという事はないのだから、教わるのではなく、自分で学ぶ姿勢が大切。いくつになっても貪欲に。KFSの仲間お互いに声を掛け合って、メンバー同志がお互いを知る為ロースタの作成を。部会を作っては。一般会員にマンスリーの当番をしてもらう。会社見学を希望する。明日からすぐ役に立つ話を。」色々な意見をありがとうございました。150%とはいませんが、会員皆さんの希望に添えるよう努力する事を、お約束致します。

いや久し振りにKFSが燃えました素晴らしい意見を、たくさん。皆さんもKFSが好きなんだなあ——。

中島正義

●マンスリーサロンのお知らせ

とき 6月17日(金) 6時30分より
ところ 神戸市勤労会館 403号室
神戸市中央区雲井通5-1-2
☎ (078) 232-1881

講 師 杉村啓介氏

昭和55年京都大学経済学部卒業、神戸市入庁
1990年11月より1994年2月までミラノ駐在員
現在 神戸市企画調整局総合計画課総合計画
担当係長

テーマ ベネチアにみる
イタリアの都市の盛衰

会 費 一般 1,000円

慶長五年九月十五日

樂 ミュウ

コラージュ
田中 德喜

馬 沢

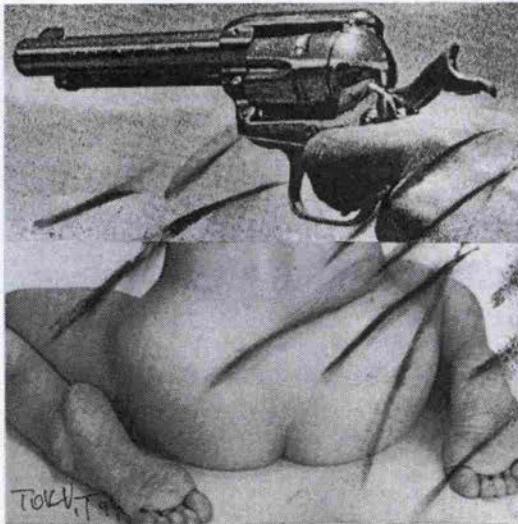


「もどって支度しよ」
為助はさなえの肩を抱いて、屋敷のほうへ歩くようにな
うながした。さなえは仕方なく、為助に従つた。
「ゆっくり行こ。こけたらあかんのやろ」

為助は指でさなえの腹をさがし、そつと撫でた。それ
から、ひどい雨やなと言つて、口の中に入りこんでくる
雨を、唾といっしょに吐き出した。

さなえはもう泣きやんでいたが、為助だけを嘆らせて
いた。涙を通り越したあと、うつろな感覚がさなえを
無口にしていた。

雨にうたれながら、為助は自分の何もかもを知つてい
る、さなえは考えていた。とても気楽でいて、お前は
こういう女なんだと見せつけられるような、どうしよう
もない窮屈さを感じた。
もう屋敷のすぐそばまで、来ていた。



「着替えをして、そんで……いや、あったまつてから、」

為助はそこで口をつぐんだ。さなえの足が止まつた。

男のうめき声が聞こえ、そのあと、女のひきつるような声がしたのだった。

ふたりは屋敷に駆け込んだ。竈のまわりが、荒らされていた。さなえは急いで、はなと寝ていた部屋へ入つた。

（はな、だいじょうぶ？）

さなえは口に出して言うつもりが、言えなかつた。

薄明かりのなかで、床柱にもたれて、はなは座りこんでいた。片手に鎌を持ち、血だらけだつた。

さなえと争助がきたのが、見えてるのかいないのか、焦点のさだまらない目をしていて。口は半開きにあいていたが、そこから声は聞こえてこなかつた。

着物は乱れていた。頑丈でよく働きそうな二本の足は八の字に、畳の上に投げ出され、胸元からは乳房がのぞいていた。全身に返り血を浴びたはなは、へんに大人びてみえた。

はなのすぐそば、さなえがほんの少し前まで横になつていた寝床の上に、頬骨の突き出た見知らぬ男が倒れていた。

引き裂かれた脇腹を手で押さえて、体を丸めていた。野仏に着せる願布のような小さな鎧が、結んでいる紐がとけて胴から離れていた。さなえがつくった握り飯を食べたのか、唇の横に、飯粒がついている。

男はもう生きていなかつた。

（うちが、そばにいてやつたら……。うちのかわりはなが

……）

さなえは立ちすくんだ。はなを中心にして、部屋全体をぼんやり見つめた。一瞬だが、放心したはなの姿が、住職を殺した若い市右衛門とすりかわって見えた。

為助がはなに近づいて、かたく握りしめていた鎌を、奪うようにして取りあげた。そして、はなを抱き上げた。

小柄な為助の、どこにこんな強さがあつたのだろう

と、さなえは思つた。

「着替えを」

為助が歩きだしながら、ささやくように言つた。

「あっ、あっち」

さなえは自分の着物を置いている小部屋を指さして、為助の前を歩いた。

一步踏み出すたびに、膝頭が震えた。その震えとは無関係に、泥だらけの濡れた足の裏と、板張りの廊下が擦れ合つてキュッ、キュッと小気味のいい音をたてた。

小部屋にはなを座らせると、為助は出ていった。さなえは暗い部屋で、手の感触と勘で、はなの着物を脱がした。間近に血を見るのも、はなの顔を見るのも怖かつた。間近に血を見るのも、はなの顔を見るのも怖かつた。

さなえは自分も脱いで、その水浸しの着物で、はなの顔と胸のあたりと腕、足をふいた。

はなは、人形のようにされるままにしていた。

「これ、水。急げよ」

為助が桶と手拭を持ってきて、すぐにまた出ていつた。さなえは血をふきとつた着物を丸めてから、明かりをつけた。

為助が用意した桶は、市右衛門が髪を洗うときに使つているものだつた。

桶は買い替えたばかりで、新しかつた。木の匂いがしきつた。削られて間もない木肌には黒ずみも、欠けたところもなかつた。市右衛門は、そういう桶しか使わなかつた。

桶の水で手拭を洗いながら、はなに付いた血を丁寧にふきとつた。水は赤く染まつていつた。市右衛門の桶を汚すことなく、さなえは罪を感じた。

「きれい」

水の色を見て、はなが口をきいた。

「そやな」

さなえは、はなが言葉を忘れないといつたわかつて、少

しほっとした。すると、死んだ男は戦から逃げ出したか
つただけかもしれないという考えが浮かんできた。

男は戦が恐ろしくて、腹が減つて、たまたま勝手口の
あいていた家に入った。娘がいて、その娘が欲しくなっ
た。男は娘の抵抗にあって、死んだ。

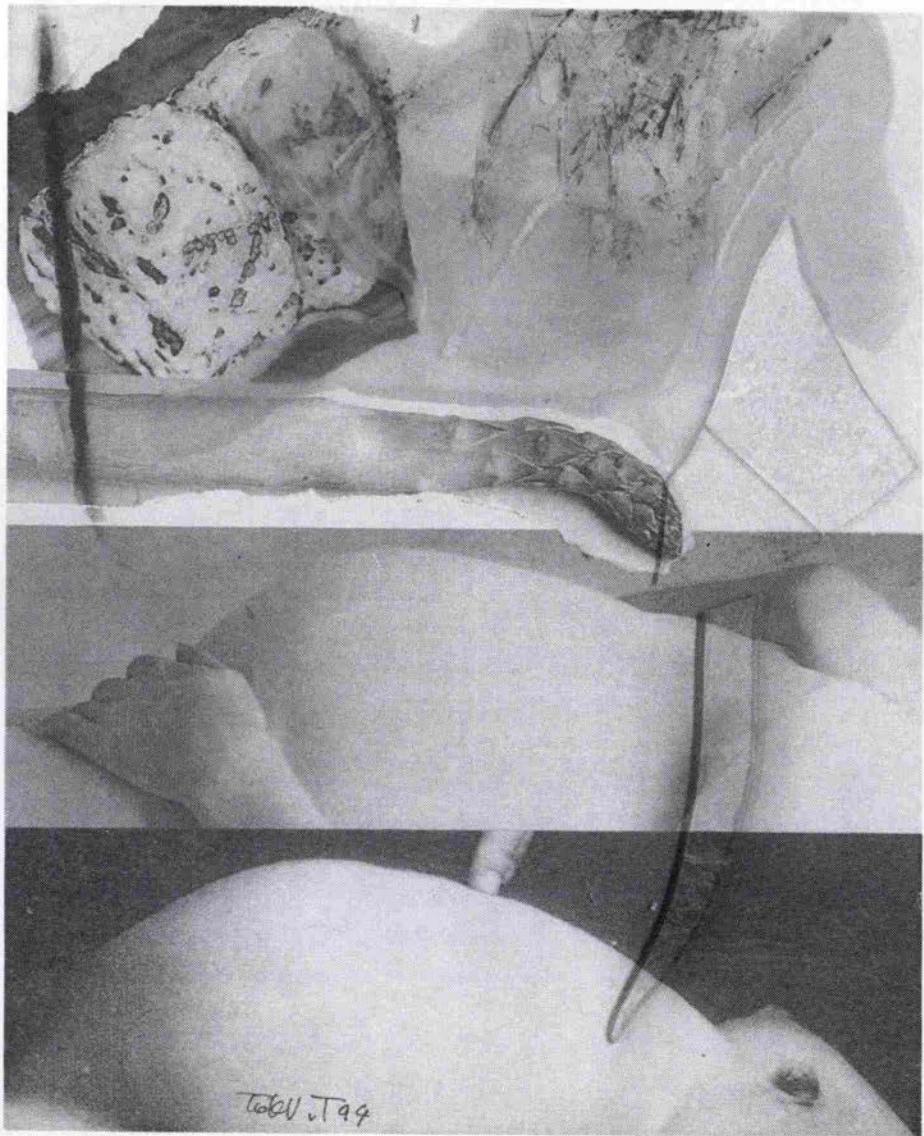
今年十一歳になるはなは、用心のために置いていた鎌
をつかって、男を殺した。知らない村で、家族に看取ら

れることもなく男は死んだ。男は兄と同じように、戦の
犠牲になつた者のなかの一人かもしれないと思つた。

男が死んだからこそ、そう思つた。はなが生きていな
ければ、そんなことは考えなかつた。

「まだか？」

離れたところから、為助のせかす声がした。
「もうすぐや」



さなえは、長持のなかから、はなが以前好きだと言つて、いた小袖を取り出した。

「これ、もう返してくれんでええから。着て」

さなえが渡すと、はなは両手でその小袖を抱えて持つた。ふいに、はなの目に涙が満ちてきた。

「どうしよう。奥さん、どうしよう」

はなは泣きながら、小袖をつかんでいる手をさなえに見せた。

「この手で、人を。人を」

小刻みに震えるはなの手を、さなえは自分の両手で包んだ。

「だいじょうぶや。な、これ、着よう」

さなえは、はなの手から小袖を取つて、着せた。着せ終わつて、さなえが身支度を始める、泣きながらはなは、さなえを手伝つた。

為助にいそがされ、血の混じつた桶の水も、死んだ男もそのままにして、屋敷をでた。

5 早朝

雨はまだ降つていた。やみそうになかつた。

三人とも蓑と笠をつけていた。為助が松明で足元を照らし、真ん中にさなえ、その横にはなと並んで、一塊に縄で縛られて、いるかのように体を寄せあつて歩いた。

さなえとはなはそれぞれ、枕元に置いていた小刀と木の棒を、蓑のなかに隠れた手に持つて歩いた。争助は、死んだ男が、籠にたてかけて置いていた槍をもつてきていた。生死にかかる何が起きても、不思議ではなかつた。

三人は、まわりを取り廻む暗闇に向かつて身構えながら、速足ではないの実家に向かつた。

途中、家の戸締まりをしていて、さなえらと同じような格好をして歩いている村人數人に出会つた。短く声をかけあつたが、さなえと為助が寄り添つて歩いていても、取り立ててどうこう言う者はいなかつた。

二人のことを承知しているからではなく、村人には、戦が始まろうとしている時に、他人のことを考える余裕がないらしかつた。二人が駆け落ちしようとしていると、勘ぐる者もいないようだつた。

はなを実家に送りとどけた。別れ際、はなは雨の中を、外まで見送りに出てきた。さなえは、「いいから、戻つて」と言つた。それで、はなは戸口の方へ向き直つたが、その背中をさなえはさすつた。別れを言うかわりにそうした。はなは二、三歩、歩いてから振り返り、素早くお辞儀をして、家中へ消えた。

はなを家をでてから、あの寺へ向かつた。村を離れる前に、さなえはどうしても行つておきたかった。

「もうちょっとで、夜明けやで」

歩きながら、為助がさなえをなじるように言つた。

恐らく、朝になつたら戦が始まる。それまでに、村からなるべく遠い所へ逃げたほうがいいということは、さなえにもわかつてゐた。だが、寺へ行くぐらいの余裕はあると思っていた。

「ごめん」

さなえは頭を下げた。

夕方、はなのためにアケビとムカゴを取つた場所にさしかかつてゐた。この道を通つたのは、ほんの昨日のことだつたとさなえは思い返した。

馴染んでいたはずの道は、だが、まったく別の道のよう、なぜかよそよそしく感じられた。

「うち、この道、よう通つたわ」

さなえは無理やりに、そう言つた。何か言つてほしかつたが、為助は黙つてゐた。

山道へはいった。

道は雨で滑りやすくなつていて、雨が降つていなければどうということはない、短い、ごくゆるやかな上り坂を、為助に助けられながら、さなえは歩いた。

雨の零は、胸や背中や腋や腹に容赦なくはいりこんできていた。

寺は雨に降られながら、たつていていた。

人が住んだことはなく、そこで何事も起こらないまま朽ち果てたかのように、とても静かだった。

さなえは堂のなかに入った。うしろから、松明を持った為助がつづいた。堂のなかは、外と同じくらい雨が降つていた。

「ひどい雨潛りやな」

為助は、不快をとおりこした笑い声をたてた。雨の日に寺へきたことはなかった。

「ほんま。ひどいなあ」

さなえは雨にさらされて、そのうち柱が倒れ、屋根が落ち、いつか堂が木と瓦の残骸になる様子を想像した。

「もう、ここへは、けえへんやろなあ」

さなえは奥の隅に、床の乾いた所を見つけた。そこにしゃがんで、住職とその女房のために、持っていた握り飯をそなえた。はなが殺した男が食べ残した握り飯は、二つだった。

為助は後ろにつつ立つて、さなえのすることを見ていた。握り飯に向かって、さなえは手を合わせ、住職と女房が淨仏するようにと心のなかで唱えた。それから、目を閉じた。すると、様々なことが思い浮かんだ。

寺の女房と市右衛門は駆け落ちしようとして、出来なかつたこと、鉄砲をつくり続けて、この村で死んだ兄のこと。戦が終わって、自分と為助がいなくなっているのを知つて、おまつがきつと嘆くだろうこと…。

「はよ、行こ」

為助がつまらなさそうに言つた。さなえはしゃがんだまま、為助を見上げた。

「握り飯は、死んだもんやのう、生きてるもんが食うもんやで」

為助はそう言っておいて、さなえから顔をそらした。

「こんどは、いつありつけか知れんのに」

「うるさいなあ」

さなえは立ち上つた。その思いつめた目を見て、為助は力なく笑つた。

さなえは先に堂を出た。為助はうしろからついていったが、出際に、大急ぎでとつてかえし、さなえがそなえた握り飯をひとつ、口の中に詰め込んだ。

雨は小降りになつてきていた。

寺から、一息に坂道を下りきつた所で立ち止まり、二人は村と、村につづく平地を見渡した。

真っ暗な中に小さく、松明のともしびの列が見えた。西の方角だった。ともしびの列は向い側の山にものびていた。それは死者の靈を弔う送り火のようであり、行儀よく並んだ人魂、そのもののようにもみえた。
(大勢の人が死んでいく)

さなえの心臓の鼓動がはやくなつた。

さなえは思った。

恐らく、自分は市右衛門の子を産むのだろう。松尾山で市右衛門が死ぬとしたら、いや、生きのびたとしても、市右衛門の命を引き継ぐ子を産むだろう。そして、それが、これから先の為助との暮らしを、いつか壊すもとになるのだろうと。

さなえは、今、市右衛門が愛しかつた。

おまつもおまつの亭主も、はなも、この村も、失おうとしている何もかもが、愛しかつた。為助はもう、そばにいてもいなくても、どちらでもよかつた。

さなえは別れてゆく人達を思いながら、ともしびの一つ一つを、じつと見つめた。

為助が持つてゐる松明から、燃えてゆく木のはじける音が、聞こえた。

(母さんに、なるんやな)

ふいに、さなえは、そのことに気づいた。母さん、母さんと胸の中で繰り返し言つて、言葉の響きを確かめた。

為助はさなえにみつかないよう、ゆっくりと口を動かし、少しづつ握り飯のみこんでいた。

△了△